

若手研究者コラムリレー

秋本 成晴（あきもと しげはる）



プロフィール

平成国際大学 専任講師
法政大学 兼任講師
立教大学 兼任講師
専門領域: アダプテッド・スポーツ科学

静岡県生まれ、神奈川県育ち
2015年 筑波大学体育専門学群 卒業
2023年 筑波大学大学院人間総合科学研究科修了 博士(学術)
2023年より現職

E-mail: akimoto@hiu.ac.jp



↑ボッチャ大会の大会実行委員長として司会をしている様子。
右のポスターも自作しました！

わたしの研究

パラリンピックと障害者スポーツ： 東京大会の反省と未来への道筋

パラリンピックという、皆さんはどういったイメージをお持ちでしょうか？多くの人が「障害者の(ための)大会」とお答えになるかと思います。しかし、パラリンピックに出場するためには、そもそも特定の障害を有していなければいけません。そして、こうした条件を満たす障害者は、障害者全体の中でも実は少数派です。聴覚障害や発達障害、精神障害等は参加資格には含まれません。そうすると、パラリンピックが「障害者のための大会」と標榜することに違和感を覚える人も少なくないでしょう。さらに重要なことは、(これは私が下記の研究で明らかにしたことですが)パラリンピックを観てポジティブな心理的影響を十分に受けられるのは、パラリンピアンと同じ障害を有している人に留まるということです。故に、多くの障害者にとってはパラリンピックが「他人事」であっても不思議ではなく、実際に、私が精神障害のある人へ行ったインタビューにおいて対象者の1人は、パラリンピックについて「(我々とは関係のない)別世界の話」と表現されていました。

いずれにせよ、日本の障害者スポーツを導く指針として東京2020大会が十分に機能したとは言えそうにありません。今後日本は、この反省を生かしつつ、障害者スポーツを前に進めていく必要がありそうです。私も微力ながら、それを後押ししていけるよう、今後も研究を展開していきたいと思っています。

わたしの渾身の論文・書籍・記事

秋本成晴・澤江幸則 (2020) 一般の障害者のエンパワメントとしてのパラリンピックの限界: 障害種の違いに着目して. 体育学研究, 65: 337-347.



なんでも帳： ～大学の教員はやめられない～

今年の夏のことです。私が授業前に学生と話をしていると、「あ、オリンピックってもう始まっているんですか？」と学生が言いました。既にパリオリンピックの開会式が終わり、数日が経った頃です。この出来事があった以降、「大学生はオリンピックについてある程度のことを知っている」という前提がもはや通用しなくなっているのだと感じました。話が逸れるようですが、「分断」という単語が世界を語る上でのキーワードとなって暫くとなります。学生と話をしても、学生間でフォローしているYoutuberも違えば、観ているNetflixの番組も全く違います。一方、私が育った家庭では、毎週末は父がチャンネル権を持っていました。ですので、つまらないゴルフも、よくわからない囲碁も見せられました。当時は嫌でたまらなかったが、観たくないものを観ることについて、今の学生ほど抵抗はないのかもしれない。

一方、オリンピックに関する上記前提が通用しなくなった今の学生は、自分の興味関心のある世界のみが眼前に広がっているスマホという強敵を(授業中も?)手にしています。そんな彼らの多くにとって興味のない障害者スポーツの世界に、どうしたら彼らを引き込めるか、日々考えては挫折しています。

ただこの前、そんな障害者スポーツに全く興味のなかったはずの学生の1人が私のとこにやってきて、「来年は、秋本先生のゼミに入ることになりました」と言いました。

こういう瞬間があるので、大学の教員はやめられないですね。

日本体育・スポーツ・健康学会 若手の会からのお知らせ

2018年8月に日本体育・スポーツ・健康学会若手の会が発足しました！→ メーリングリスト登録フォーム:
<https://goo.gl/forms/zGMPdPq5fY3kcB5q2>

学会大会、研究会等の開催や報告者募集に関する案内、公募や助成金情報等に関する情報提供を配信予定です。皆様からも、メーリングリストで周知したい情報がありましたら、下記までご連絡ください。

taiikugakkaiwakate@gmail.com

